埋文よこはま13

財団法人 横浜市ふるさと歴史財団 埋蔵文化財センター　平成 18 年 3 月 28 日発行

大高見遺跡・小高見遺跡

―縄文時代早期と中期の集落あと発見―

◆遺跡の位置とあらまし

大高見遺跡は都筑区大丸２・11付近に、小高見遺跡は都筑区荏田南一丁目７～10付近にあります。ここは港北ニュータウン地域の南西部に当ります。二つの遺跡は縄文時代の集落あとです。これらは隣り合っていて、大高見遺跡が丘陵の頂部に、小高見遺跡がその南西側へ緩やかに下る斜面上に位置しています。横浜市の北部では縄文時代の集落は多くが小高い台地の上にあります。両遺跡も南を鶴見川、西を鶴見川の支流である谷本川、北を同じく早渕川で囲まれた、標高60～75mの台地上に営まれていました。

勝坂式土器（大高見遺跡）

これら二つの遺跡は昭和50年に発掘調査が行われました。現在、ここには住宅やマンション、ショッピングセンターなどが立ち並び、港北ニュータウンの一角になっています。調査当時と現在とを比べると、大きく景観が変化しています。

遺跡の場所

両遺跡からは縄文時代早期と中期の集落あとが発見されています。港北ニュータウンの地域内には三の丸遺跡、大熊仲町遺跡、二ノ丸遺跡などの大きな遺跡があります。これらは住居の数が100～300軒以上にも及ぶ規模の大きな縄文集落あとです。大高見遺跡は縄文時代早期と中期を合わせても22軒、同じく小高見遺跡は14軒です。比較的規模の小さな集落でした。両遺跡の周囲は縄文時代の大小の集落址が密集している地域であり、遺跡が営まれていた当時はそれらの集落間に密接な関係があったことが考えられます。

両遺跡の周辺には整理作業が終了していず報告書が刊行されていない遺跡が多く残っています。今後の整理作業・研究の進展によって当時の様々な事柄が明らかになっていくことが期待されます。

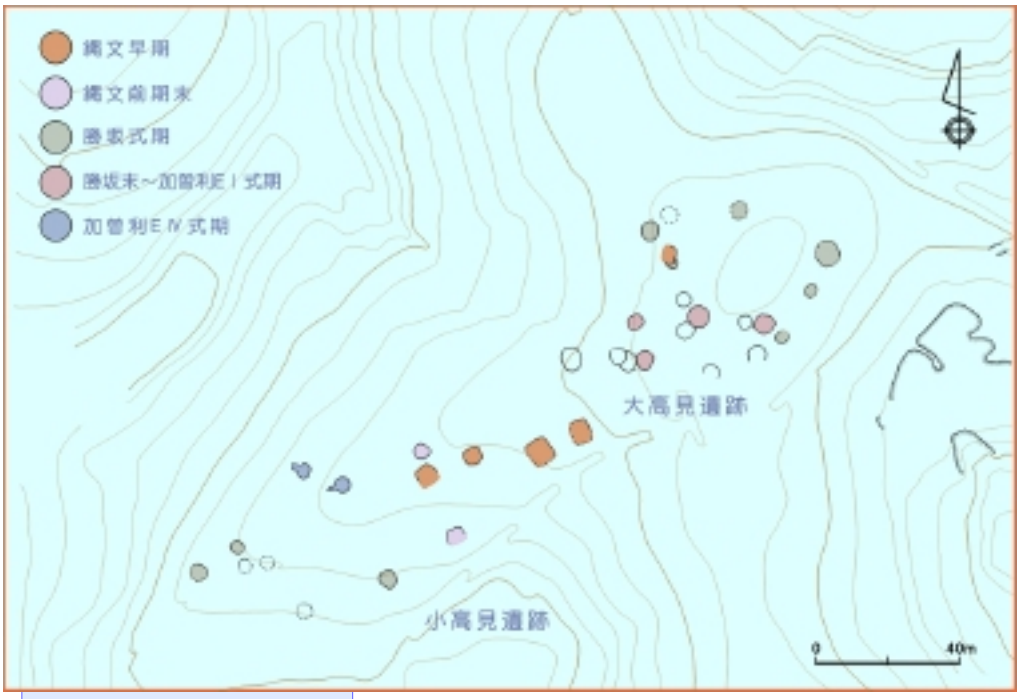
◆縄文時代早期の集落

縄文時代早期の前半に撚糸文土器と呼ばれる土器が作られ、使われていました。器の形が大砲の砲弾に似ています。その表面に撚糸文と呼んでいる縄文の一種を転がしてつけています。撚糸文土器はいくつかの時期に分けられています。大高見・小高見遺跡からは稲荷台式と呼ばれるものが出土しました。完全な形のものはなく、破片で出ています。

撚糸文期の住居あとは四角い形の平面形をしているものが多いです。柱の穴は位置が定まっておらず、床面にバラバラに多数掘られています。柱の穴は小さな掘り込みで、割合細い柱であったことが分かります。このことから当時の住居の中を想像すると、

早期撚糸文期の住居あと（小高見遺跡）

入口を入ると細い柱がたくさん立っている状態ということになります。現代の私たちからすれば、なんだか住みにくそうですが、普段から森の中で活動していた縄文人たちにとってはたいして気になることではなかったのかもしれません。この時期の住居の中には炉のあとがありませんでした。土器を使った煮炊きは住居の外で行われていたとみられています。



大高見・小高見遺跡の遺構分布図

　撚糸文期の住居あとからはスタンプ形石器と呼ばれるものが発見されます。これはその名のとおりスタンプ形をした石器です。クルミなどの木の実をつぶすために使われた道具と考えられています。大高見遺跡・小高見遺跡からは合計５軒の撚糸文期の住居が発見されていますが、このうち４軒からスタンプ形石器が出ています。

　縄文時代早期の住居あとは小高見遺跡では尾根に沿うように４軒の住居址が並んでいます。大高見遺跡ではそこから少し離れて１軒検出されています。縄文時代早期の集落はこのように数軒程度で構成されていたようです。これらすべてが同時期に営まれていたかどうかははっきり分かりません。しかし、大高見・小高見遺跡から出ているものの特徴に共通性が見られることから、これらの住居址にそう大きな時期差はなかったと考えられます。

◆縄文時代前期末の集落

　小高見遺跡では縄文時代前期末の住居あとが２軒発見されました。おそらく十三菩提式（じゅうさんぼだい）期とみられます。１軒は平面の形が円形です。もう１軒は四角い形をしています。発見された土器の特徴が異なることから、やや時期差があったようです。それぞれ単独で営まれていたことが考えられます。

加曽利Ｅ式土器（大高見遺跡）

◆縄文時代中期の集落

　縄文時代中期は約１万年続いた縄文時代の中でも、最も多くの遺構や遺物が残っている時期です。集落の規模も大きくなり、人口も増えた時期でした。この頃の港北ニュータウン地域の縄文時代の集落は甲信（こうしん）地方の中部山岳地帯方面との関係が深いとみられます。それは勝坂（かつさか）式と呼ばれる土器や、それに続く時期の曽利（そり）式と呼ばれる土器が出ていることからうかがうことができます。

　勝坂式期が終わると、この地域では加曽利Ｅ式と呼ばれる土器が使われます。これは勝坂式土器の分布圏（甲信地方）よりも東寄りの関東地方に分布圏をもつ土器です。大高見遺跡のＪ２号住居あとからは、加曽利Ｅ式土器と一緒に同じ時期の甲信地方の曽利式土器も出ています。甲信地方を分布の中心とする土器と関東地方を分布の中心とする土器が一緒に出ていることは、大高見遺跡に暮らした人々が両方の土器の

曽利式土器（大高見遺跡）

大高見遺跡Ｊ２号住居あと

文化圏の人々と交流していたことを示しています。

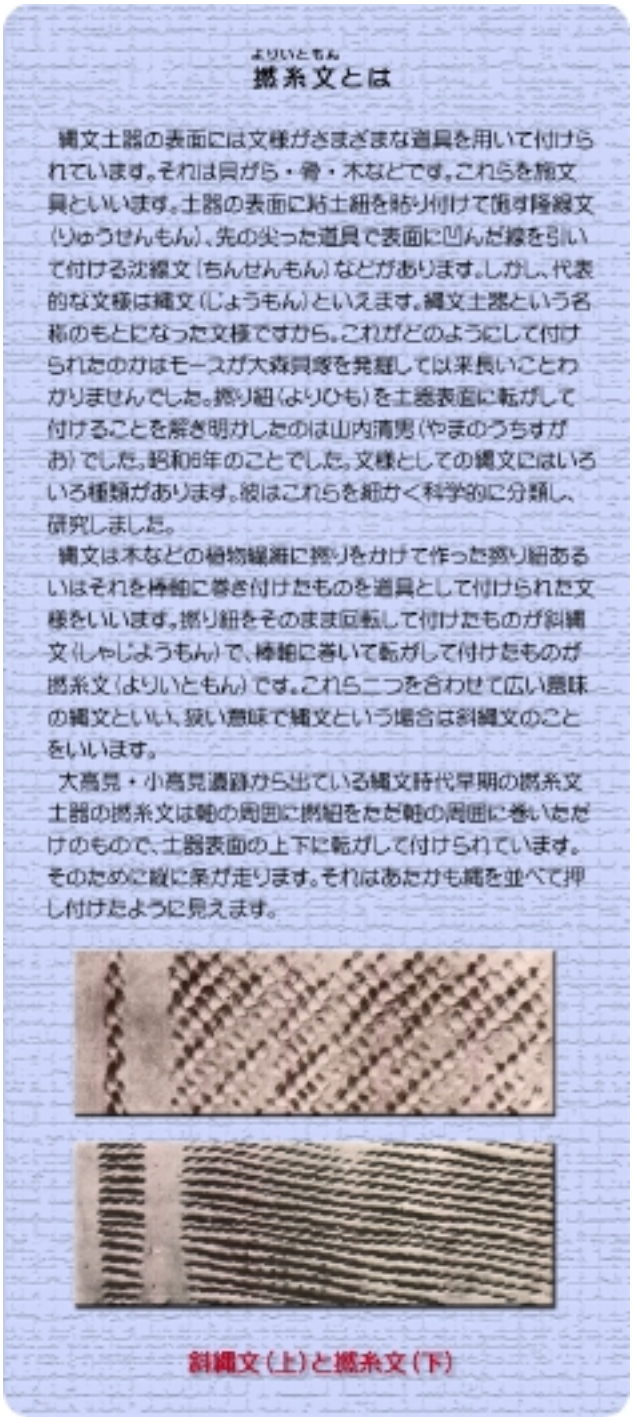
大高見・小高見遺跡から出土した勝坂式期の遺構や遺物はその終わり頃の時期ものが多くあります。その後に続く加曽利ＥⅠ～ＥⅡ式期の遺構や遺物も発見されています。その間連続して集落が営まれていたと考えられます。しかし、同時期に営まれていたと考えられる住居は多くても数軒です。近くにある大きな集落から少し離れたこの場所に数軒が建っていた、というイメージが正しいと考えられます。

勝坂式期の終わりから加曽利Ｅ式期にかけての竪穴住居をみると、しっかりと掘り込んだ住居の床面に、太い柱の

小高見遺跡Ｊ９号住居あと

穴が規則的に掘られています。住居の床面の中央付近には炉が設けられています。煮炊きも屋内で行っていました。先ほど見た縄文時代早期の住居とは大きな違いがみられます。

縄文時代中期の終わり頃（加曽利ＥⅣ式期）には、小高見遺跡で「柄鏡形（えかがみがた）住居」と呼ばれる住居が２軒つくられました。これは平面形が文字通り円い鏡に柄のついた形をしていることからそう呼ばれている住居あとです。細長く張り出した柄が出入口にあたります。その張り出しは２軒とも西の方向を向いています。柄の先端部と根本にあたる部分には土器が埋められていました。小高見遺跡のＪ９号住



撚糸文（よりいともん）とは

縄文土器の表面には文様がさまざまな道具を用いて付けられています。それは貝がら・骨・木などです。これらを施文具といいます。土器の表面に粘土紐を貼り付けて施す隆線文（りゅうせんもん）、先の尖った道具で表面に凹んだ線を引いて付ける沈線文（ちんせんもん）などがあります。しかし、代表的な文様は縄文（じょうもん）といえます。縄文土器という名称のもとになった文様ですから。これがどのようにして付けられたのかはモースが大森貝塚を発掘しては来長いことわかりませんでした。撚り紐（よりひも）を土器表面に転がして付けることを解き明かしたのは山内清男（やまのうちすがお）でした。昭和8年のことでした。文様としての縄文にはいろいろ種類があります。彼はこれらを細かく科学的に分類し、研究しました。

縄文は木などの植物繊維に撚りをかけて作った撚り紐あるいはそれを棒軸に巻き付けたものを道具として付けられた文様をいいます。撚り紐をそのまま回転して付けたものが斜縄文（しゃじょうもん）で、棒軸に巻いて転がして付けたものが撚糸文（よりいともん）です。これら二つを合わせて広い意味の縄文といい、狭い意味で縄文という場合は斜縄文のことをいいます。

大高見・小高見遺跡から出ている縄文時代早期の撚糸文土器の撚糸文は軸の周囲に撚紐をただ軸の周囲に巻いただけのもので、土器表面の上下に転がして付けられています。そのために縦に条が走ります。それはあたかも縄を並べて押し付けたように見えます。

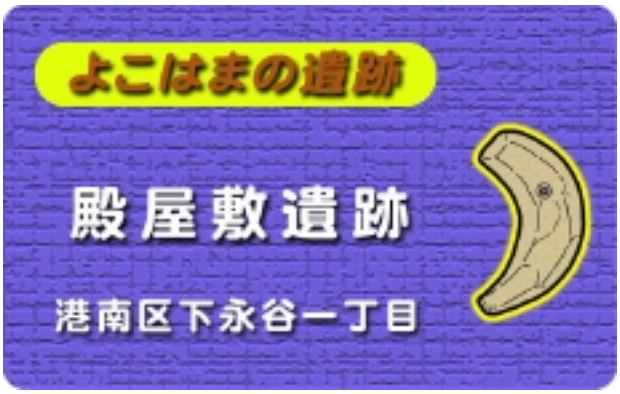
斜縄文（上）と撚糸文（下）

居の床面、特に奥壁寄りには河原石が多数敷かれていました。

大高見・小高見遺跡は縄文時代中期の末で終わりを迎えます。

◆お知らせ

大高見遺跡・小高見遺跡の報告書が平成17年12月に刊行されました。両遺跡について詳しく知りたい方は市内の図書館や各地の埋蔵文化財センターなどで閲覧することができます。



◆遺跡の位置と地形

殿屋敷遺跡群は港南区下永谷一丁目28付近にありました。ＪＲ東海道線戸塚駅の北東約３km、京浜急行電鉄京浜急行本線上大岡駅の西約３kmに位置しています。

遺跡群は柏尾川の上流域の永谷川とその支流の芹ケ谷川との合流点に向って北西に張り出す丘陵の先端部に営まれていました。標高は60m前後。西側を流れる永谷川との比高差は約40mです。

◆遺跡の発掘

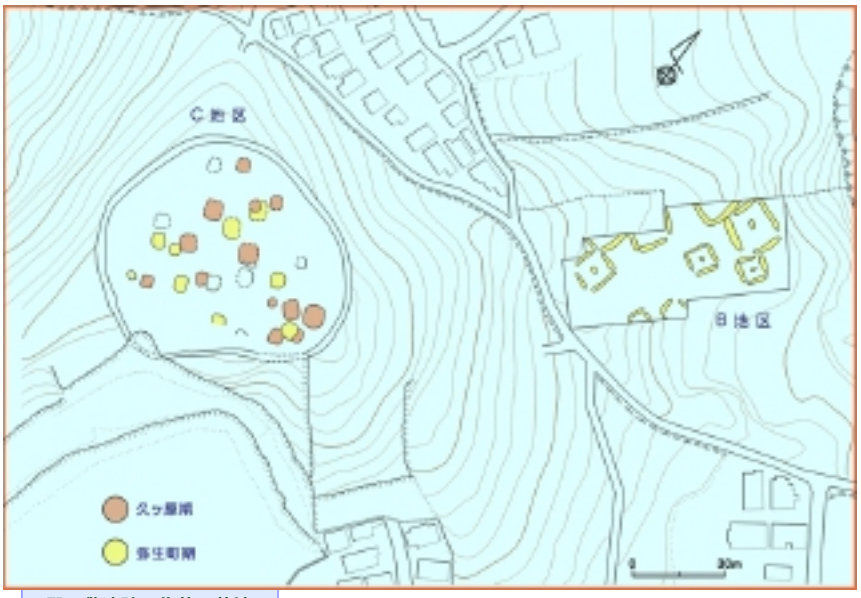
殿屋敷遺跡群は、永谷川に北西に張り出す中ほどの西斜面のＡ地点、その北方向丘陵最先端の低い丘陵部分のＢ地点、その南西のＣ地点からなりたっています。

Ａ地点では弥生時代後期久ヶ原期から弥生町期の住居あと14、古墳時代前期五領期の住居あと１が発見されています。Ｂ地点は弥生時代後期弥生町期の方形周溝墓が検出されています。これらの方形周溝墓はきわめて近く接しているにもかかわらず重複していないことから、比較的短い期間に築かれたとみられます。Ｃ地点では竪穴住居あと28とそれらをとりまく環壕が出ています。弥生時代後期久ヶ原期から弥生町期のものです。

殿屋敷遺跡群は調査者によると次のように移り変わったといいます。弥生時代後期久ヶ原期から弥生町期にかけてＣ地点の環壕集落とＢ地点の方形周溝墓群が一つの組み合せとなる集落構成をしています。Ａ地点の住居あと群はＣ地点の集落から分離したものと考えています。

遺跡群の周辺には永谷川を挟んで西に約600mに弥生時代後期の環壕集落そとごう遺跡があります。北約1.5kmには平戸遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代前期の住居あとと方形周溝墓が発見されています。柏尾川の西方には弥生時代後期の集落あとと前期古墳からなる東野台遺跡があります。これらの遺跡と集落の構成や墓地などを検討することによって、この地域の米作りの生活から古代国家が生まれてくる姿をうかがうことができます。

発見された弥生式土器



殿屋敷遺跡の集落と墓地

埋蔵文化財センターのご案内

出土品や整理作業のようすを見学できます（予約が必要です）。埋蔵文化財や歴史に関する質問も歓迎します。

開所：午前９時～午後５時。土・日・祝日休み。

交通：東横線「綱島駅」より東急バス１番乗り場「勝田折返所」行終点。田園都市線「江田駅」より東急バス「綱島駅」行「勝田」下車。

ホームページアドレス
http://www.rekihaku.city.yokohama.jp/maibun/index.html

＊「埋文よこはま」は、横浜市域で発掘調査された遺跡や出土した遺物を紹介する広報紙です。

埋　文　よ　こ　は　ま　13
発　行　日　2006年３月28日
編集・発行　財団法人 横浜市ふるさと歴史財団
埋蔵文化財センター
〒224-0034　横浜市都筑区勝田町760
ＴＥＬ　045-593-2406
FAX　045-593-2403